



横浜本町北横丁より海岸西の波止場を見渡す之図  
（『横浜開港見聞誌』より）

当館所蔵の浮世絵  
一般に多色刷木版の浮世絵を錦絵といい、開港期から文明開化期にかけての横浜の町並や外国人の風俗、外国の風景・風物を描いたものを「横浜浮世絵」とか「横浜絵」といいます。八月から開催される「五雲亭貞秀と横浜浮世絵」展にちなみ、貞秀の作品にスポットをあてて、当館所蔵の浮世絵を紹介します。

当館所蔵の浮世絵  
当館で収集した浮世絵は約八〇点、そのうち七〇パーセントが横浜浮世絵である。作者別にみると五雲亭貞秀のものが群を抜いて多く、約二〇〇点、芳虎・若貞・三代広重がこれに続く。貞秀の作品の約半数は、故P·C·ブルーム氏のコレクションに含まれていたもので、そのうちには横浜浮世絵以外のものが約九〇点ある。つまり、ブルーム氏は、横浜浮世絵に限らず、貞秀の作品を系統的に収集されていたわけである。おそらく日本でも有数の貞秀コレクションであろう。当館所蔵の浮世絵を紹介する展示の最初に、まず貞秀の作品を取り上げたのは、そのためである。

### 五雲亭貞秀について

貞秀は本名橋本兼次郎、画姓は歌川、玉蘭齋・五雲亭などと号した。文化四年（一八〇七）下総国布佐の生まれと伝えられる。三代豊國（国貞）の門人で、師国貞の

# 港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY

●編集・発行／横浜市総務局横浜開港資料館  
横浜市中区日本大通3丁231  
電話（045）201-2100  
●発行日／昭和61年8月1日  
●印刷／（有）三信印刷所

## 五雲亭貞秀の横浜浮世絵

### 収蔵資料の紹介

一般に多色刷木版の浮世絵を錦絵といい、開港期から文明開化期にかけての横浜の町並や外国人の風俗、外国の風景・風物を描いたものを「横浜浮世絵」とか「横浜絵」といいます。八月から開催される「五雲亭貞秀と横浜浮世絵」展にちなみ、貞秀の作品にスポットをあてて、当館所蔵の浮世絵を紹介します。

当館所蔵の浮世絵  
当館で収集した浮世絵は約八〇点、そのうち七〇パーセントが横浜浮世絵である。作者別にみると五雲亭貞秀のものが群を抜いて多く、約二〇〇点、芳虎・若貞・三代広重がこれに続く。貞秀の作品の約半数は、故P·C·ブルーム氏のコレクションに含まれていたもので、そのうちには横浜浮世絵以外のものが約九〇点ある。つまり、ブルーム氏は、横浜浮世絵に限らず、貞秀の作品を系統的に収集されていたわけである。おそらく日本でも有数の貞秀コレクションであろう。当館所蔵の浮世絵を紹介する展示の最初に、まず貞秀の作品を取り上げたのは、そのためである。

### 五雲亭貞秀について

貞秀は本名橋本兼次郎、画姓は

歌川、玉蘭齋・五雲亭などと号した。文化四年（一八〇七）下総国布佐の生まれと伝えられる。三代豊國（国貞）の門人で、師国貞の

自作自画である。最も早いのは文政四年（一八一九）、存命中のものと思われる最後の作品は、明治八年（一八八〇）に出版されているから、作画期間は幕末・明治初期の五五年である。これを四期に分けて、おおまかに画業をたどってみると、

つぎのようになる。

①第一期「文政四年から安政六年（一八一七）までの横浜開港まで」版本の挿絵から、錦絵や自作自画の版本に手を広げ

るるものと思われる。

遠近法の採用は、すでに多くの

平合戦に題材を採った武者絵が多かった時期である。忠臣蔵や源

平合戦に題材を採った武者絵が多かった時期である。

②第二期「横浜開港から文久年間まで」集中的に横浜浮世絵と取り組んだ時期である。

③第三期「文久年間から慶応年間まで」将軍上洛や長州戦争、その舞台となった東海道や西国の風景等時局がらみの作品が多い。

④第四期「明治初期」文明開化の風物を扱った「開化絵」や「西洋新書」等啓蒙書の挿絵が多い。前者の一環として再び横浜を取りあげ、「横浜鉄橋之図」や「横浜一覽之真景」のような大作を遺した。

『神奈川県立近代美術館編』及び『集大成横浜浮世絵』（神奈川県立博物館編）の解説で触れるが、没年は定かでない。

『神奈川県美術風土記 幕末明治初期編』（神奈川県立近代美術館編）及び『集大成横浜浮世絵』（神奈川県立博物館編）の解説で触られるが、没年は定かでない。

依田百川の伝えるところによるると、貞秀は「凡そ浮世絵の上乘は、『おぞらく銅版画』を見せたという（『風俗画報第一号』明治二十一年）。貞秀の作画態度を知ることでできる興味深い証言である。彼は歴史の証人たることを浮世絵師の使命と考えていたわけであり、正確・精密な描法のあくなき追求と、そのための洋画の研究もその点にかかわるものと思われる。

遠近法の採用は、すでに多くの

①第一期「文政四年から安政六年（一八一七）までの横浜開港まで」版本の挿絵から、錦絵や自作自画の版本に手を広げ

るものと思われる。

遠近法の採用は、すでに多くの

浮世絵師が洋画から学びとつてお

り、貞秀も早くからこれに習熟し

（八頁へ続く）

館長（遠山茂樹） 本日は、国際基督教大学の準教授で、日本史を担当されていますステイールさんにお越しいただきました。日本語が大変お上手ですが、日本に来られてどのくらいでしょうか。

ステイール（M. WILLIAM STEELE） 国際基督教大学に来て五年になります。学生時代、もう一八年程前になりますが、国際基督教大学に一年、またハーバード大学の大学院の時に、一年間東京大学史料編纂所に留学しました。ハーバードでの指導教官はクレイグ（Albert CRAIG）教授で、教授は長州藩の研究、いわば勝利者から見た明治維新を研究されましたので、今度は敗けた側の研究をやりなさいということです。わたしは幕臣、主に勝海舟の研究をしまして博士論文にまとめました。しかし、それは政治史、リーダーたちの歴史であつて、それだけで全てを説明できない。当時の庶民は愚民あるいは無意識な存在では決してなく、いろいろな情報を集め自分なりの利益のために活動していたのではないか、それが明治維新という政治上の事件をこえて、近代化のエネルギーになっていたのではないか、

# 館長対談

と気になりまして、政治史から社會史的な方面に关心が移ってきて  
います。それで資料を少しづつ集  
めていまして、日記とか瓦版、錦  
絵など、ペリー来航から維新まで  
の一五年間のそいつた社會史的  
な資料集を英語でまとめてみたい  
と思って今とりかかっているところ  
です。その意味で、この資料館  
で現在開催されています『名主日  
記が語る幕末』展は大変参考にな  
りました。

に強いですね。海外新話や世界地図を写したり。たいしたものだという印象をうけました。それから、関口家当主の三代目までは絆姿ですが、天保生まれの四代目になりますとハイカラになつて、シルクハットをかぶつてモーニングになつていますね。そのあたりの村のリーダーたちの文明開化は大変興味深いものがあります。こういった関口日記のような資料が遺っている例は珍しいのではないか。

それでは日記を民衆の生活史の中  
料として活用することはできま  
ん。閑口日記は一人ほどの市中  
の方々が一七年間かけて全部を  
読み出版されました。お蔭で今  
の展示ができました。

史 氏 民 回 収 せ せ 解 う 東 ん し て く わ と を う つ  
心にした企画展示を準備していくま  
す。横浜浮世絵の紹介でもあります  
が、同時に、民衆がどういう立  
場から横浜の開港に関心をもつた  
のかに興味があるわけです。横浜  
絵を買う人は民衆、といつても上  
層の人たちでしょうが、そういう  
人たちの開国・開港にたいする意  
識、考え方を横浜絵を通して明ら  
かにできればと期待もしています。  
次回の展示を担当します斎藤さん  
に同席してもらいましたので、斎  
藤さんから五雲草貞秀の紹介をお  
願いします。

纂所に留学しました。ハーバードでの指導教官はクレイグ(Albert CRAIG)教授で、教授は長州藩の研究、いわば勝利者から見た明治維新を研究されましたので、今度は敗けた側の研究をやりなさいということ、わたしは幕臣、主に勝海舟の研究をしまして博士論文

館長　ステイールさんは幕末維新期を社会史的な観点から研究なさいと重なるところがあつたかと思いますが、展示を御覧になつた感想をお聞かせください。

**館長** 最近は、各地の市町村史の編さん  
が盛んになって、名主の日記がいくつか  
発掘されています。名主の日記は文化文政期以降比較的  
多くなってきます。それ以前は、農  
記をつけるのは武士であって、農  
民身分の者が日記をつけるという事  
はあまりありません。江戸時代後期にな  
って名主の日記がこのよう

「 ころがありませんでした。全体を通してみるとまた違うのでしようが。」

館長 そうでしょうね。一般に名主の日記は、金銭の出入とか人への付合いとか家のことが記述の中心ですから、一部だけを取り出すと、内容は面白いとはいませぬしかし、全体を通してまとめてみると、生活の変化、世相の移り変わりを読みることができます。

藤さんから五雲亭貞秀の紹介をお願いします。

斎藤多喜夫（館員） 外国の方で

斎 藤 館 員

レベルが高いこと、漢詩をものしたり、寺子屋をやつたり、かなりの文化的な素養をもつていたことに

ことはあまりありません。江戸時代後期になつて名主の日記がこの代まで残されてくるのは、貨幣経済・商品経済が発展し交通も盛になり、地主層の視野がひろがつたことがあります。それと、いまひとつは教育の普及でしょう。寺子屋が農漁村にもできる、それだけ教育に対する要求が民衆の中にでてくるということでもあります。そんな

しかし、全体を通してまとめてみると、生活の変化、世相の移り变わりを読みとることができます。

貞秀を最初に評価したのは、イギリスの日本学者であるサンソムさんの「西欧世界と日本」だと思います。貞秀は浮世絵師ですが、葛飾北斎や安藤広重の亡き後の低調期といわれている時期にひとり気をはいた絵師で、幕末の浮世絵師の第一人者であるとともに、横浜

ことで、名主の日記は今後研究が必要な部をそつくり活字化した例は少しある。労力が大変ですから。しかし、市町村史でも部分的に引用されているだけで、全部をそのまま活用することはできません。関口日記は一〇人ほどの市町の方々が一七年間かけて全部を毎日読み出版されました。お蔭で今日の展示ができました。

ステイール わたしのおります東京三鷹の野崎村の名主の吉野さんのお宅にも日記が遺されていましたので、維新期のところを拝見させていただいたことがあります。わたしの関心からはあまり面白いところはありませんでした。全体を通してみるとまた違うのでしょうか。

館長 そうでしょうね。一般に名主の日記は、金銭の出入とか人の付き合いとか家のことが記述の中心ですから、一部だけを取り出したり、内容は面白いとはいえません。しかし、全文を通してまとめてみると、生活の変化、世相の移り変わりを読みることができます。

を地盤とする伝統的な文化状況とはちょっと様相が違ってきます。浮世絵などもそのひとつあらわれかと思いますが、この資料館では、関口日記の展示に続きまして、八月から五雲亭貞秀の浮世絵を中心とした企画展示を準備しています。横浜浮世絵の紹介でもあります。が、同時に、民衆がどういう立場から横浜の開港に関心をもつたのかに興味があるわけです。横浜絵を買う人は民衆、といつても上層の人たちでしょうが、そういう人たちの開国・開港にたいする意識、考え方を横浜絵を通して明らかにできればと期待もしています。次回の展示を担当します斎藤さんと同席してもらいましたので、斎藤さんから五雲亭貞秀の紹介をお願いします。

絵に本格的に取組んだ人でもあります。ここに貞秀の作品リストを用意しましたが、これをみますと、初期には絵草紙の挿絵が多く、合戦もの、武者絵を描いています。そのうち自分で絵も文章も両方書くようになります。

ステイール いつからですか。

斎藤 天保一〇（一八三九）年の『桜風呂花半開』が最初のようです。貞秀は、『南総里見八犬伝』などの歴史ものの挿絵を描きますが、もうひとつ特徴として、博物学的な関心が強く、山の絵や虫の絵を克明に描いています。それから地図ですね。日本ばかりでなく『万国地球分図』も描いています。そういう下地があつて、開港直後から集中的に横浜を題材にした浮世絵を描きます。そして文久二（一八六二）年頃からは東海道や西国に関心が移り、明治に入ります。それが文明開化期の横浜に戻ります。万延元（一八六〇）年と文久元（一八六二）年の二年間、貞秀はほとんど他のことをやらなくて再び文明開化期の横浜に戻ります。それがどうしてなのかということになります。ステイールさんが先程好奇心といわれましたが、貞秀についてもいえるかと思います。また、洋画への関心があり、いものにたいする好奇心と同時に、銅版画のように正確に描きたいと

いう欲求が貞秀の中にあつたのではないか、そのふたつを満たす場所がすなわち横浜であつたと思いますね。

ステイール パースペクティブの影響がみられますか。

斎藤 遠近法は横浜絵に取組む以前からあります。斎藤さんからの話にあります。

館長 斎藤さんからの話にあります。

斎藤 遠近法は横浜絵に取組む以前からあります。

館長 斎藤さんからの話にあります。



遠山館長

すように、貞秀の絵の特徴は、開港場の様子や外国人の生活を、リアルに描いたことにあります。題材の上でも、手法の上でも見られる特徴は、浮世絵の変化、発展の中から生まれたのかどうか、私には興味がそそられます。大胆な言葉をしますと、浮世絵の伝統の中から近代絵画の芽がでているのか、あるいは外からの刺激や影響という助けが必要だったのか。それは、絵画ばかりではなく、文学にせよ同じような問題があると思いますが。

館長 スティールさんの今のお話を聞きましたが、貞秀の作品リストの文久二年のところに『横浜開港見聞誌』があります。文久二年というのは、生麦事件のあつた年で、政治の面では攘夷の動きが一番盛んだった時なんです。その年に、貞秀は横浜の外国人の生活を紹介して、この本が結構売れてるんですね。これひとつをとつてみると、貞秀の言葉として伝わっているものに、「およそ浮世絵の上乗は、その時の風俗をありのままに写して偽りざらず、後の世に遺して」とは違った社会の流れがあることに一步踏みこんで理解していると考証にそなえしむるにあり」があります。ある意味では洋画の精神で横浜に来て外国人を観察しているんですね。貞秀の『横浜開港見聞誌』をみてみると、外国人は

居ながらにして天の橋立を見ることができるとか。これは一種のデイスカバー・ジャパン運動であり、日本人にとって新しい開けた世界像のはじまりでした。と同時に、文化文政期の歌舞伎や見せ物といった面白いもの、珍しいもの、時にはグロテスクなものへの関心・好奇心もでてきています。横浜に「異人」が来たこともそれとつながっている面があつたのだと思います。それでも、万延元年と文久元年から翌年にかけての横浜絵は社会史の貴重な史料になります。描いた人の問題もありますが、誰が、いくらで、何のために買ったのか、誰が、買ってからどう使ったのか、どういう役目をもつていたのか、社会的な観点から非常に興味深いものがあります。

館長 スティールさんの今のお話を聞きましたが、貞秀の作品リストの文久二年のところに『横浜開港見聞誌』があります。文久二年というのは、生麦事件のあつた年で、政治の面では攘夷の動きが一番盛んだった時なんです。その年に、貞秀は横浜の外国人の生活を紹介して、この本が結構売れてるんですね。これひとつをとつてみると、貞秀の言葉として伝わっているものに、「およそ浮世絵の上乗は、その時の風俗をありのままに写して偽りざらず、後の世に遺して」とは違った社会の流れがあることに一步踏みこんで理解していると考証にそなえしむるにあり」があります。ある意味では洋画の精神で横浜に来て外国人を観察しているんですね。貞秀の『横浜開港見聞誌』をみてみると、外国人は

海岸通り二丁目入口(『横浜開港見聞誌』より)  
中央に黒人の夫婦、右手に中国人、左手に子供を連れた西洋人の夫婦

われわれと確かに姿形は違つてゐる、だから「異人」である、しかしその心は同じである、ということが言つてゐるわけですが、それをして描いています。たとえば、

斎藤 前回の展示（『黒船絵巻と瓦版』展）で、瓦版と黒船絵巻をとりあげたのですが、瓦版は好奇心の直接的なあらわれ、悪くいえばいいかげんな情報に基づいているところがあり、一方の黒船絵巻には正確な記録をとつておこうとする態度がみられます。瓦版の基調には素朴な攘夷思想があつて、迷惑だから早く帰ってくれ、といふことがあります。一方で黒船絵巻にみられるように物事を正確に知ろうとする流れがあります。横浜絵にもこのふたつの流れがあるかと思います。ただ瓦版と違う点は、自分でその気になれば事実を確めることのできる時代になつていたということがあります。貞秀は、眞実を確めたといいう眼で横浜を取り材し、開港期の横浜を描きにした人だと思います。貞秀の洋画に対する関心も、単に美しいから惹かれたというよりは、正確だから惹かれたのだと思いますね。

親は子供をあやす、われわれと同じじゃないか、また、黒人の夫婦は仲むつまじい、これも同じじゃないか、と。福沢諭吉がいわばアメリカやヨーロッパで西洋をつかんだとすれば、その前に、貞秀は横浜で西洋というものをつかんでるといえるかと思います。

ステイール 先程、瓦版はいか

かどうかは別にしまして、外国の言葉を入れたものがあつたりして、ある意味でインフォメーションを伝えようとする態度もあつたので

はないか。また、一方に攘夷の考え方に基づく恐い野蛮な異人像というもののがありながら、同時に「異人」をかわいいと見る考え方もある。三、四年前に『E.T.』という映画があつて、そのなかにかわいい宇宙人が登場してきますね。それと同じようなユーモラスな見方、「異人」をとりこむよう見方もみられるのではないか。そういったヒューマンな暖かい気持ち、いろいろな新しいことや珍しいものを探りたいという好奇心が横浜絵の細かな描写につながっていくのだと思います。横浜絵をみていますと、攘夷の面よりも、文明開化のルーツがはつきりあらわれています。それにしてもやはり面白いのは、攘夷が最も激しかった時が横浜絵のブームにあたつていて、『横浜開港見聞誌』のようなある意味でクールな紹介が同時にあつたというアンビバレンツな状況ですね。

館長

横浜の街を考えますと、城下町ではなかつたわけですから、地附の武士は少なく、江戸や関東・東海地方の養蚕地帯や製茶地帯からやってきた商人・農民たちによつて横浜の街は成り立っています。

横浜とそれらの地域との間の交通も活発でした。開港・貿易の影響は、各地の民衆の生産と生活に変動をよびおこしています。横浜に来たたちは、お土産として横浜絵を買い、故郷に送り、あるいは

え方に基づく恐い野蛮な異人像というもののがあります。同時に、「異人」をかわいいと見る考え方もあります。三、四年前に『E.T.』という映画があつて、そのなかにかわいい宇宙人が登場してきますね。それと同じようなユーモラスな見方、「異人」をとりこむよう見方もみられるのではないか。そういったヒューマンな暖かい気持ち、いろいろな新しいことや珍しいものを探りたいという好奇心が横浜絵の細かな描写につながっていくのだと思います。横浜絵をみていますと、攘夷の面よりも、文明開化のルーツがはつきりあらわれています。それにしてもやはり面白いのは、攘夷が最も激しかった時が横浜絵のブームにあたつていて、『横浜開港見聞誌』のようなある意味でクールな紹介が同時にあつたというアンビバレンツな状況ですね。

館長

最後になりますが、アメリカの研究者からみまして、日本史研究にたいする感想なりをお聞かせください。

ステイール 欧米の日本研究はまだですが、最近は、たとえば

ティリー(Charles Tilly)がフランス革命の研究で用いたような社会史的な観点からの明治維新研究ができました。一般的に、日本近代化のエネルギーはナショナリズムで説明されていますが、

面白くあります。それで、この時期はとくにそうです。

ステイール 日本の研究者の方は、

今までの明治維新的見方は政治史が強すぎます。同時に、庶民の動き、彼らの好奇心をもつと強調する必要があると思いますね。

ステイール そう思いますね。いままで明治維新的見方は政治史が強すぎます。同時に、庶民の動き、彼らの好奇心をもつと強調する必要があると思いますね。

最近はちょっと違つてきています。社会史的な観点からしますと、ナショナリズムよりも、たとえば先にふれた「好奇心」がひとつ理由になるのではないか、という感じがします。

館長 戦後、政治史や経済史の研究は発展しましたが、それに比較すると文化史の研究はあまり進展していません。しかし、政治史や経済史だけでは歴史の全体の動きは説明できないのであって、芸術・宗教・生活の中で養われた感性・意識が変動期には、意外に大きな役割をはたすものだと思います。

ステイール 欧米の日本研究はまだですが、最近は、たとえばティリー(Charles Tilly)がフランス革命の研究で用いたような社会史的な観点からの明治維新研究ができました。一般的に、日本近代化のエネルギーはナショナリズムで説明されていますが、

面白くあります。それで、この時期はとくにそうです。

ステイール 日本の研究者の方は、

持つて帰りました。農山村の人々は、それを見て新しい世界を想像し、関心をよせました。好奇心は、真実を知ろうとする欲求の出発点です。これが文久年間の情況ですね。イギリス外交官のオールコックなどの見方でいえば、確かに武士階級の間では攘夷は盛んである、しかし、商人・農民たちは攘夷を支持していない、それは横浜での貿易の盛況が示しているではないか、ということになります。これなどをみましても、明治維新はいくつのレベルのちがつた動きが合わさって進行したと考えたほうがよいというのが最近の歴史学界の考え方ですね。

ステイール そう思いますね。いままでの明治維新的見方は政治史が強すぎます。同時に、庶民の動き、彼らの好奇心をもつと強調する必要があると思いますね。



左からステイール氏、遠山館長、斎藤館員

斎藤 特に美術史は美術史で別個のものになつていまして、ステイールさんが横浜絵を社会史的な資料としてみていくというのは面白い視点だと思います。先程、ステイールさんがおっしゃつたように、横浜絵の世界は、イメージとして、は文明開化につながります。他方、攘夷から明治維新を経て富国強兵につながる流れがある。このふたつの流れがどのように交錯していくのか、たいへん興味があります。

横浜の場合は、洋画から多くのものを学びますが、かといって浮世絵を捨て、油絵を書こうとするわけではありません。異質なものは異質なまま、しかもそこに共通のもの、学びあえるものを認めるわけです。この微妙なバランスが欧化主義とか国粹主義になると崩れてきます。日本の近代文化と伝統文化との関係は、結局どうなつたのでしょうか。

館長 斎藤さんが投げかけた伝統文化と文明開化、それと近代文化の関係を、断絶ととらえるのか、連続ととらえるのかは大きな問題です。

ステイール もう一方で、外国人にとっても日本がどうなつていくかという可能性を探る実験場でもありました。

館長 今日は長時間ありがとうございました。

(六月一八日の対談です)

ステイール わたしもその立場ですが、江戸時代を再見してみますと、鎖国といながら、好奇心が発達していリフォームのための準備、土台になつたことを強く感じますね。開国がチャンス、きっかけになつたのでしようが、好奇心がなければ西洋のものを充分に生かすことができなかつたと思います。新しいもの、変わったもの、珍しいもの、面白いものがいききと/orする、そういう場が開港期の横浜だつたのでしようね。横浜は、たとえてみれば、近代化の展示場であり、実験場だったわけです。いろいろな関心から横浜が注目されています。商人たちは貿易の面から、武士は封建制度を守る立場から、農民は生産の変化と物価騰貴の問題から、様々な職業、立場から横浜を注視する。横浜がどうであるか、どうなるかということが同時に日本ができる進むか、日本をどうするかに結びついて明治一〇年代では特別な位置にあつたといえるでしょう。

ステイール もう一方で、外国人にとっても日本がどうなつていくかという可能性を探る実験場でもありました。

館長 今日は長時間ありがとうございました。

# 『名主日記が語る幕末』展余話

## 生麦村の商業者

前回展示の余話というよりは、むしろ展示の主要なテーマであつた「生麦村の商品経済化」に関する資料を紹介しよう。

文久二年に起つた「生麦事件」に関する諸記録などを見ると、東

海道に面する生麦村ではすでに幕末期には旅人相手の店が軒を並べていたようである。これらの店はいつごろから生麦村にでき始めたのだろうか。

この疑問を解く手がかりになる資料としては、(A)「御改革御取締御出役江書上帳」(天保三年)一

八三四、(B)「閑口詮家文書」と、(C)「往還筋村々ニテ商ひ致し候もの名前書」(天保一四年 同)がある。両方とも文書作成時点で村で商業活動をしている人間・商業種目をリストアップし、その開業年次を付したものである。この二資料の内容を整理して一つにまとめ、掲出の表を作成してみた。

表を作るに際して気になったのは、(A)と(B)はたつた一年違ひの資料なの内容に大きな違いがあることであった。(B)が質屋業そのものをリストアップの対象にしていないのを別にしても、なお両者の小商業者リストには相当な差異がある。具体的にいえば、質屋業以

生麦村商業者の業種と開業年次

No.	家 名	持高	西暦	業 種	
1	五郎兵衛後家*	1.9	1796	質物渡世	A
2	惣八後家	13.1	1797	質物渡世	A
3	次郎右衛門*	53.8	1798	質物渡世	A
4	安兵衛		1803	質物渡世 (注1)	A
5	勘兵衛	.2	1815	質物渡世	A
6	勘左衛門*	.9	1820	質物渡世	A
7	喜十郎	3.7	1821	質物渡世	A
8	六郎兵衛*	1.6	1823	質物渡世	A
9	十左衛門恵*	8.5	1825	質物渡世	A
10	茂七*	1839		質物渡世	A
11	平兵衛	18.6	1840	質物渡世	A
1	源四郎	2.8	1716	酒食肴類煮壳 (注3)	*
2	伝七	5.4	1748	酒食肴類煮壳	*
3	五郎兵衛後家*	1.9	1752	居酒白米荒物小壳	*
4	六郎兵衛*	1.6	1764	刻煙草	B
5	孫四郎	1.8	1777	升酒春米荒物	B
6	浅右衛門	.1	1777	酒食肴類煮壳	*
7	久蔵	.9	1779	居酒白米荒物小壳 (注2)	*
8	利右衛門	2.2	1780	居酒白米荒物小壳	*
9	勘左衛門*	.9	1789	豆腐屋	B
10	平左衛門	.0	1797	茶漬茶屋	B
11	長八	4.0	1800	居酒白米荒物小壳	*
12	庄三郎	2.4	1801	粂屋	B
13	安兵衛*		1803	砂糖茶小壳	B
14	彦右衛門	1.6	1812	荒物	B
15	丹蔵	-	1818	古着小きれ類商ひ	A
16	五左衛門	.6	1819	酒食肴類煮壳	*
17	茂七*		1820	春米荒物類	*
18	庄次郎		1821	居風呂湯渡世	A
19	勘四郎	30.9	1822	居酒白米荒物小壳	*
20	次郎右衛門*	53.8	1822	居酒白米荒物小壳	*
21	九郎兵衛恵	.1	1825	酒食肴類煮壳	B
22	甚五郎	1.2	1826	春米荒物	A
23	藤五郎		1826	春米荒物類	*
24	重右衛門	-	1827	居風呂湯渡世	A
25	三十郎	1.7	1827	荒物	B
26	十左衛門*	8.5	1828	醤油造	B
27	万次郎	2.5	1828	水油荒物	B
28	平五郎	.2	1830	居風呂湯渡世	A
29	伊兵衛	3.1	1836	古着小きれ類商ひ	*
30	武兵衛		1837	春米荒物類	*
31	源蔵	.6	1837	甘酒餅類水菓子	B
32	利平次	.2	1841	居風呂湯渡世	A
33	勘右衛門娘		1841	水菓子荒物	B
34	弥五郎	.0	1841	茶漬茶屋	B
35	龜次郎		1842	水菓子	B

(出典)本文中に記載。注1)「四十年以前始夫ヨリ後家暮ニテ相候十八年以前文政八西年ヨリ」2) Aには「六拾五年以前安永八亥年始中十三年以前天保元寅年」、Bには、「安永8年(1779)「升酒春米荒物」3)別に、安永6年「居酒白米荒物小壳」開業の記載あり。4)「業種」は、Bにしか記されていないもののみBの表現に従った。5)「家名」欄の\*は、他の業種でも表中に登場。6)最右欄は記載してある資料を示す。\*はAの両方に記されている。7)持高は、単位=石、斗未満省略、一は無高、空欄は天保7年元別帳に家名が見当らないことを示す。

の半が二石未満の零細な持高所有者であること。

第三に、一人ものの「質物渡世」があり、そのなかに二石未満の零細な持高者が少なくとも四人いること。

つまり、生麦村の商業の基本的な特徴は、多数の零細石高所有者による旅人相手の飲食・サービス

業にあつたと言える。とすれば、前述の二資料の違いは、このよう

な商業者個々の不安定な商業状態を示唆しているものであろうか。

あるいは、天保改革の帰農的政策の直接的・間接的影響によるものだろうか。あるいはその両方によるものだろうか。

さて、冒頭の問い合わせれば、生麦村で東海道を行く旅客を相手とする商業活動が盛んになり出

幕末に最も羽振が良かつたのが、資料(A)によれば享保元年(23年)に開業

(B)によれば安永八年(7年)に開業したとされている桐屋源四郎の茶

店であろう。慶応期の彼は、慶応二年の村内困窮者への施金に際し

宿場ではないものの東海道に面したことがあるがのち廃業・休業し

たために表に登場しないものも相

当数あつたであろうことは、これまでの検討から十分に推測できるところである。

これら生麦村の商業者たち、

幕末に最も羽振が良かつたのが、資料(A)によれば享保元年(23年)に開業

したとされている桐屋源四郎の茶

店であろう。慶応期の彼は、慶応二年の下女九人を雇傭していた(慶応三年宗門人別帳による)。宿場ではないものの東海道に面する村での、このようなサービス業的営業の発展と、それが周辺地域に与えた影響を、改めて評価す

したのは、一七七〇年代、安永の頃からと言つてよいようである。これ以降、天明・天保の飢饉期、(七七八九年および二三〇九年)を除いて、ほぼ順調に開業が相次いでいる。安永から天保の末までの約五〇年間に約三〇人の商業者が西川氏執筆部分(参照)、一四二二歳の下女九人を雇傭していた(慶応三年宗門人別帳による)。

宿場ではないものの東海道に面する村での、このようなサービス業的営業の発展と、それが周辺地域に与えた影響を、改めて評価す

る必要があると思われる。(井川克彦)

# 資料ともやまばなし

## ウォルシユ=ホール商会



アメリカ一番  
シメンス  
ホール  
住家

幕末ころ横浜居留地で発行された英字新聞には、雑多な広告がのっている。新品がついた!という広告は、りっぱにニュースたりえていた。

商品広告にまじって、貿易商人がだすNOTICEという「公告」も、おなじよう人に目をひく。会社設立のご案内、などの通信文でいどこの内容である。

ところが、一見、無味乾燥ふうにみえるさまざま「広告」の類が、横浜居留地をうつしだす鏡であるばかりでなく、そこに住まう外国人商人の動向をあきらかにしてくれることも事実である。

通称「亞米」<sup>アメ</sup>といふ。だが、その実態は從来、ほとんどわかつていない。さきの広告にからませて、ここに論じる価値はあるだろう。

一八五九年（安政六）七月の横浜開港にあわせ、条約国の商人はつぎつぎと到着した。玉蘭齋貞秀の『御開港横浜大絵図』二編外国人住宅図（一八六一年か）によれば、つぎのような表示が当時の居留状況を説明している。

### NOTICE

**M** R. FRANCIS HALL is this day admitted a partner in our business at this port, which will hereafter be conducted under the name of WALSH, HALL & Co.

The business of this firm will be strictly that of Agency and Commission.

WALSH & Co.

19<sup>th</sup> Kanagawa, 19th April, 1862.

\*図1 The Japan Herald.  
17 May, 1862.

### NOTICE.

The interest and responsibility of Mr. FRANCIS HALL in our firm ceased on the 31st March last, and Mr. JOHN A. CUNNINGHAM was admitted a partner on the 1st inst.

WALSH, HALL & Co.

Yokohama, May 14<sup>th</sup>, 1866.

\*図2 The Japan Times' Daily Advertiser.  
18 May, 1866.

「アメ」は、居留地「1番」となった。一八六年のおわりころである。だが、1番になつたはずの「アメリカ1番」は以後も、「亞米」<sup>アメ</sup>と通称された。2番の当主がかわらなかつたのに由来する。ところで、さきの絵図の「アメリカ1番」には、二名の人物がいる。「シメンス」は、のちに横浜十全病院嘱託医になるシモンズ博士Dr. D. B. Simmons であろう。リカ「一番」といつた。「入船ノ番組」という入港順の住居表示がおこなわれる。しかし、この絵図が刊行されたころ、開港いらいの「入港順呼び」は廃止された。とびとびの番号では、不便であつたからである。

波止場がわを基点に「地番」整理され、今日のように敷地順にあらためられた。かつての「アメリカ」の番号では、不便であつたからである。その後、ホールはかれらの居住地であった神奈川から横浜居留地に移り (J. Hecc, *The Narrative of A Japanese. Vol. I. [1892]*)、ダ改革派教会のブラウン S. R. Brown は、神奈川からニューヨークの本部あてに、第一信を発した。五月一日夕方、ドクトル・シモンズがすでに横浜で「医者で生はじめたのである。一八六〇年五月一四日付のヘボン書簡は、シモンズがすでに横浜で「医者で生計」をたてていることに触れていた。

ホーリー氏とともに、この地に到着しました。(高谷道男編訳『ボン書簡集』)。

R. ブラウン書簡集によると、開港直後の当主フランシス・ホール Francis Hall は一八二三年、コネチカット州エリントンで生れ、来日時は三七歳である。ブラウンより一二歳下、シモンズはさらにひと回り若かった。来日した翌年、ホールは横浜居留地で本格的に貿易活動を開始するが (taught by Professor F. G. Notteleifer), それは

グリフィスがいうように「宗教上の侵入者」religious invaders の一人であつたかもしれないが (W. E. Griffis, *A Maker of the New Orient. 1902*), 断定しがた。その後、ホールはかれらの居住地であった神奈川から横浜居留地に移り (J. Hecc, *The Narrative of A Japanese. Vol. I. [1892]*)、同様に、シモンズも横浜に住みはじめたのである。一八六〇年九月一日付のヘボン書簡は、シモンズがすでに横浜で「医者で生計」をたてていることに触れていた。

しかし図1によれば、ウォルシユ=ホール商会は一八六二年四月一九日に成立した。ふと目にした「公告」である。ホールが先輩格のウォルシユ商会 Walsh & Co. に吸収されたかたちであろう。中國から進出したウォルシユ商会は開港とともに、長崎でアメリカ領事をつとめる J. G. Walsh によって開設され、いつしか同商会横浜店も T. Walsh がひらく。

南北戦争がおこつてほぼ一年、その影響がはじめたころの「合併劇」であったが、そのウォルシユ=ホール商会は図2のよう、一八六六年三月三一日で創業者の一人であるホールと訣別せざるをえなかつた。南北戦争終結一年後のホールなきあとの「亞米」<sup>アメ</sup>が一九〇一年の *The Japan Directory* では、管財人の手があつたことをつけくわえておきたい。(内海孝)



(一頁から)  
ていた。「大内合戦之図」を見る  
と、遠方に火の手を配し、前景の  
城や合戦の様子を逆光線で描いて  
おり、洋画の研究がみなみなら  
ぬものであったことが窺われる。

さらに、実地踏査に基づくと思わ  
れる一覧図的な風景画や、博物学  
的な関心に基づく「むしづくし」  
や「万象写真図譜」などを見ると、  
彼が洋画から学びとったのは、描  
法のみならず、科学的なものの見  
方にも及んでいたのではないか  
と想像される。「大日本分境図成」  
や「万国地球分図」といった地図  
の作成も、そのしからしむるこ  
とろであろう。こうした素養が横浜  
浮世絵に遺憾なく發揮されるので  
ある。

## 貞秀の横浜浮世絵

開港翌年の万延元年から翌文久



## 行事開催予定(昭和六一年度)

- (1)企画展示『五雲亭貞秀と横浜浮世絵』

## ▼講座(講堂)

- (1)前期横浜歴史講座「19世紀中葉の世界と日本」—開講中

## ▼講座(講堂)



## ▼講座(講堂)